

張氷穎（東京大学）

zbying06@hotmail.com

要旨

本研究は、中国語会話を中心に、語りにかかる聞き手行為かつ行為の裏にある心的活動に焦点を置き、聞き手行為の産出プロセスについて分析を行った。本研究では、中国語母語話者4人を対象に、12本の会話データと4本のインタビューデータに基づき、15の概念と6のカテゴリーを生成した。現段階では、聞き手行為の産出プロセスには、「内向的」と「外向的」という二つのフィルターが存在することと、語り手のターンを取る際に「意図的判断」が行われることが示唆された。本研究は、M-GTAの手法を用いて概念図を生成することによって、会話分析的アプローチを主にした先行研究には見られなかった聞き手行為が行われる際の複雑さの一端を明らかにすることができた。

1. はじめに

語りにおける聞き手行為は、一般的に言われている聞き手行為とは異なり、あいづちだけではなく、評価、情報要求、情報確認、第2の物語などの実質的な発話も期待されている。従来、聞き手行為に関する観察的研究は会話分析的アプローチが多く、分析の焦点は、参加者達による一次理解ではなく研究者による二次理解にあるため、社会・文化的要因を分析する時に、「積極的に語りにコメントしたり情報を要求したりすることは親しさを重視することで、あまり質問・コメントしない人は距離感を配慮している」（岩田 2015, 楊 2015 など）という一般的な方向に流されやすい。実際のところ、聞き手が行為を行う際に考えたものは、それより遥かに複雑で、必ずしも「親しさを重視しているから」というような単純な理由で語り手に積極的に働きかけたとは限らない。

本研究は、聞き手が行為を行う際の心的活動を対象に、聞き手行為が具体的にどのようなように影響されて、産出されているかを明らかにすることを目的とし、以下の二つの研究課題に取り組む。

①聞き手行為がどのようなプロセスを経て産出されているか。

②異なる人でも同じプロセスに従うのか。

以上の課題を念頭に、本研究は語りにおける聞き手行為の産出プロセスについて調査を行う。

2. 方法

本節では、研究方法について、2.1節で調査の手順を説明し、2.2節では研究対象とその会話相手を紹介し、2.3節では採用した分析手法と採用理由について述べる。

2.1 調査の手順**2.1.1 体験課題**

本研究は、語りにおける聞き手行為の産出プロセスに注目している。例え同じ人だとしても、異なる話相手・物語に対して異なる行為を引き起こされる可能性があると考えられる。そのため、インタビューに入る前に、「知り合いの語りの聞く」という課題を研究対象に体験させ、研究対象が具体的な状況において、実際どのように反応しているかを観察する必要がある。

体験課題の内容として、研究対象（話題上の聞き手）を3人の知り合い（話題上の語り手）とそれぞれペアを組み、知り合いたちに「実際に経験したこと、また見聞きした出来事について話してください」と指示し、研究対象に何も指示しないまま、二人が自由会話・またはビデオ通話している場面を録画する。

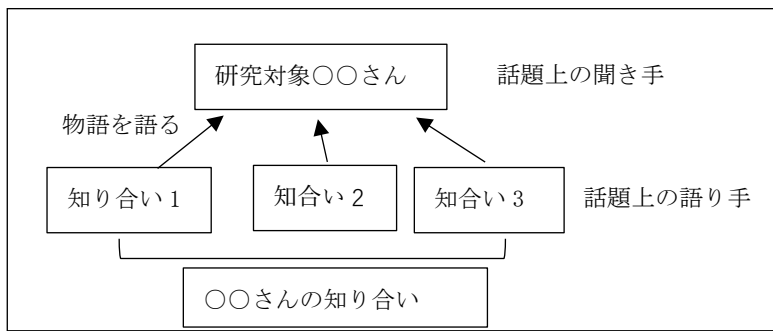


図 2.1 研究対象と語り手の組合まとめ

日常会話の語りにおいて、聞き手が「第2の物語」を通して「第1の物語」への理解を示すことができ、語り手と聞き手の役割が交替される場合がある。「第2の物語」が語られた場合、ここでの「話題上の聞き手」が「第1の物語」の聞き手に相当する。

今回の調査では、物語自体も聞き手行為の産出に影響する要因として考えているため、なるべく物語の多様性を守ることを念頭に置いている。したがって、体験課題の話題を特定せず、どのような物語を選ぶのかは語り手に任せる。ただし、語り手による話題の選択が、「話題性」を持つことを要求する。「話題性」とは、「物語が語られる価値」であり、その判断基準として「語り手にとって十分な意味を持つこと」という条件をあげている。

2.1.2 刺激再生法を用いた半構造化インタビュー

次のステップとして、刺激再生法、要するに録画したビデオを視聴させ、「語り手に働きかけた時に思ったり考えたりしていたこと」について確認するという形で、研究対象に半構造化インタビューを行う。以下が、調査で用いたインタビューガイドである。質問項目は、研究対象の話の展開、流れに沿って適宜に増加したり変更したりする。

- ① 基本情報（研究対象と語り手たちの年齢、性別、職業、関係など）を聞く。
- ② （ビデオを見せながら）どしてここでこのような反応をしたか。
- ③ この会話を楽しんでいたか。
- ④ 相手がこの会話を楽しんでいたと思うか。
- ⑤ 相手の話をたくさん聞きたいと思ったか。
- ⑥ 相手の話にたくさんコメントしたいと思ったか。
- ⑦ 自分の経験を語りたくなったか。
- ⑧ この会話を通して気付いたこと。
- ⑨ 三人の会話相手との親密度について順位付けをしてもらい、理由を聞く。
- ⑩ 三つの物語への興味度について順位付けをしてもらい、理由を聞く。
- ⑪ 三つの物語への共感度について順位付けをしてもらい、理由を聞く。

2.2 研究対象とその会話相手

本研究は、20代の女性3名、男性1名を研究対象とし、それぞれの知り合いを3人集め、それらの知り合い達を研究対象の会話相手とする。表 2.1 に示す4人が本研究の研究対象であり、表 2.2 に示す12人が語り手として集めた研究対象の知り合いたちである。研究対象とその会話相手は全員中国語母語話者である。

表 2.1 研究対象一覧

研究対象	年齢・性別	身分	インタビュー時間
ユイさん	28歳女性	会社員	1時間14分
ハルさん	23歳女性	大学院生	1時間12分
メイさん	28歳女性	会社員	1時間44分
ハクさん	25歳男性	大学院生	1時間32分

表 2.2 研究対象の会話相手一覧

研究対象	会話相手	年齢・性別	身分	研究対象による親疎判断
ユイさん	Aさん	28歳女性	会社員	疎（親友の友人、直接干渉を避ける）
	Bさん	29歳男性	会社員	親（大学時代の先輩、私的会話が可能）
	Cさん	26歳男性	会社員	親（親友、身体的接触が可能）
ハルさん	Dさん	27歳男性	大学院生	疎（同じ授業に通っている人、直接干渉を避ける）
	Eさん	26歳女性	大学院生	普通（同研究科の先輩、たまに一緒にご飯に行ける）
	Fさん	27歳女性	大学院生	親（同研究科の先輩、私的会話が可能）
メイさん	Gさん	29歳男性	会社員	普通（中学時代のクラスメイト、たまに一緒にご飯に行ける）
	Hさん	27歳女性	会社員	親（趣味が近い友人、身体的接触が可能）
	Iさん	28歳男性	会社員	普通（高校時代のクラスメイト、たまに一緒にご飯に行ける）
ハクさん	Jさん	25歳男性	大学院生	普通（ゼミの先輩、たまに一緒にご飯に行ける）
	Kさん	26歳男性	大学院生	疎（同研究科の先輩、直接干渉を避ける）
	Lさん	24歳男性	大学院生	親（ゼミの後輩、私的会話が可能）

2.3 分析手法と採用理由

本研究は、「修正版グラウデッド・セオリー・アプローチ（以降、M-GTAとする）」（木下 2007）を採用し、データから概念を抽出し、分析ワークシートを作成することで、各概念を関連付け、カテゴリを生成する。採用理由は、M-GTAは、「プロセス的特性をもっている」（木下 2007:67）研究に適しているほか、「研究する人間を他者との社会関係に位置づける」（木下 2007:91）という考え方もしているからである。本研究は、聞き手行為の産出は、物語を受け止めてから、語り手に働きかけるまでのプロセスを伴い、かつ語り手と関係を深めることを目指しているという考え方をしているため、M-GTAに適しているといえる。

3. 結果と考察

3.1 聞き手行為の産出パターン

全体からみると、研究対象の参加パターンは、大方三つ、「基本的な関心や理解のみ示す」脇役型、「積極的に語り手に割り込むが、基本語り手に情報を求めることに重心を置き、聞き手の役割に徹する」面接型と、「相手と競合して語り手役割を取り合う」競合型がある。本研究は、それぞれのタイプを、「消極的な聞き手」「積極的な聞き手」「聞き手と語り手を兼ねる会話参加者」と呼ぶ。同じ人であっても、会話相手が異なれば、語り手への参加パターンも異なる。また、同じ参加パターンであっても、そのパターンをもたらす理由が一致するとは限らない。例えば、「聞き手と語り手を兼ねる会話参加者」は、会話相手に第2の物語を語った理由として、「関係が親しい」（ユイさん→Bさん）「話題に興味がある」（ハルさん→Fさん）だけではなく、「二人の距離も遠く、興味も持たないが、相手が口下手だから自分はおもっ

と話すべき」(ハクさん→Kさん)という状況も挙げられる。

次節では、概念図に参照しながら、研究対象ユイさんを例として取り上げ、聞き手行為がどのようなプロセスを経て産出されていたのか詳しく説明する。

3.2 聞き手行為の産出プロセス

分析した結果、研究対象四人による聞き手行為の産出パターンは同じプロセスに従っていることが確認され、15の概念と6のカテゴリーが生成されている。表3.1では、各概念とその定義を示し、図3.1は、それらの概念とカテゴリーをまとめた概念図であり、聞き手行為がどのようなプロセスを経て産出されているかを表している。以下では、カテゴリーを【】、概念を<>で示す。

表 3.1 概念名と定義

カテゴリー名	概念名	定義
I 長期記憶 ¹	1. エピソード記憶	「過去の経験」のような、出来事に関する記憶
	2. 意味記憶	「相手の性格」のような、一般意識に関する記憶
II 作業記憶 ²	3. 情報理解	長期記憶に貯蓄されている視覚・言語情報にアクセスしながら聞き取った内容を理解すること
	4. 総合解釈	会話相手の非言語的なメッセージを含めた沢山の情報を総合的に解釈し、相手の気持ちに気付くこと
	5. 評価	会話相手や内容を十分理解したうえで評価すること
III 会話状況	6. 会話状況	今はどのような会話状況に置かれているかを判断すること
IV 興味点探索	7. 公的情報への好奇心	政府の政策や専門知識など、自分の知らない領域に興味を持つこと
	8. 私的情報への好奇心	就職の結果や恋の進展など、会話相手や物語の出場人物の個人情報に興味を持つこと
V 共通経験探索	9. 情報比較	語りの内容と明確な共通点または相違点を持つ「共通経験」を想起されたこと
	10. 情報交換	語りの内容と同じ空間・時間を共有した「共通経験」を想起されたこと
VI 意図的判断	11. 重要性判断	これから行われる行為が自分にとってどれだけ必要であるかを判断すること
	12. 興味度判断	これから行われる行為にどれぐらいの興味を持つのかを判断すること
	13. 負担度判断	これから行われる行為が相手にどれだけ負担をかけているかを判断すること
	14. 関係性検討	相手との関係性を考慮し、これから行われる行為が適切であるかどうかを判断すること
	15. 参加者達の性格検討	お互いの性格を考慮し、これから行われる行為が適切であるかどうかを判断すること

¹ Tulving(1982)によると、「長期記憶」は「宣言的記憶」(言語化可能な記憶)と「手続き的記憶」(言語化できず、身体の動きに関する記憶)に分けられ、「宣言的記憶」はさらに「意味記憶」と「エピソード記憶」に分けられている。会話は、言葉でコミュニケーションする行為であり、自転車の乗り方など体で覚えた記憶を使わないため、今回の研究では「手続き記憶」への言及がない。

² Baddeley(1986)は、「作動記憶」を「情報を一時的に保存・操作するためのシステム」と定義している。作動記憶は短期記憶に基づいて生成された用語だが、情報の保存に重点を置く短期記憶とは異なり、情報の保存と処理を同時に行う能動的記憶として見なされている。

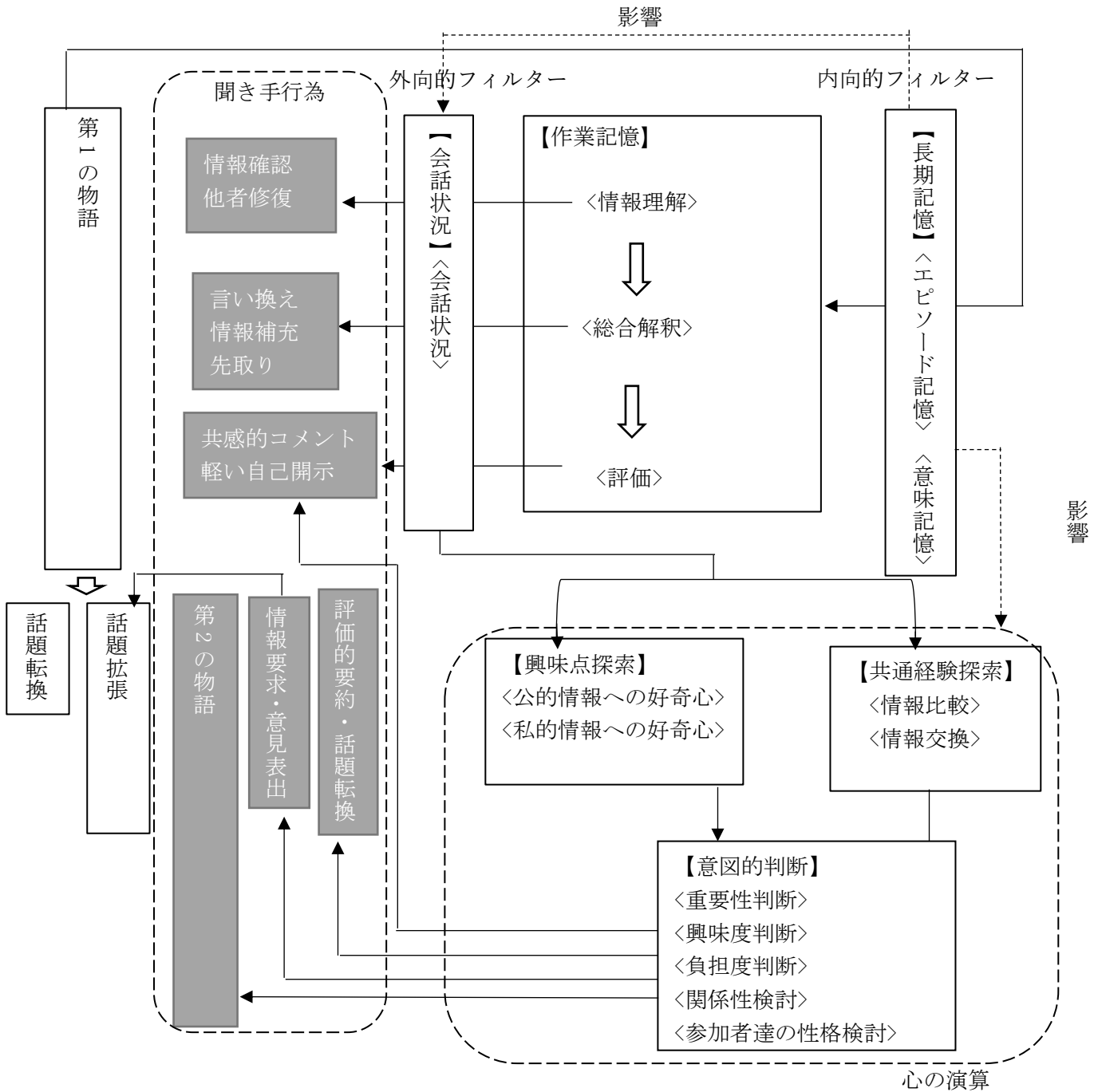


図 3.1 語りにおける聞き手行為の産出プロセス

まず、聞き手は、語られた内容や相手の非言語的メッセージを理解したり解釈したりする時は、インプットされた内容を【作業記憶】に保存する。保存する際に、話の内容を全般的に受け入れるわけではなく、【長期記憶】という内向的フィルターがかけられ、自分の頭の中で語り手に伝えられた情報を再構成する。形成された【作業記憶】は、【会話状況】という外向的フィルターを通過し、そのまま産出されるか、一旦控えて、様子を見てから産出されるか、という二択がある。また、一時的に控えられていた【作業記憶】は【興味点探索】や【共通経験探索】によって特定され、【意図的判断】を通して最終的にどのような行為を産出するかが決められる。

【断片 1：上司に対する不満】

01 A：没有最起码的感恩＝也不会对你说感谢（.）

「再低限の感謝もないしありがとも言わない」

02 特别说如果他再是你的上司他就更加地那种[（.）]理所应当.

「特に上司という身分だとなおさらその」 「それを当たり前だと思っちゃって」

03 ユイ：

[我特别 hh

「私はよく」

→04 ユイ：我特别理解这个心情 hh.

「よく分かりますその気持ち hh」

05 A：对（.）然后就很烦.

「そう、本当にうっとうしくて」

Aさんとユイさんは友達紹介によって知合った仲であり、以前チャットソフトを通して連絡を取っていたが、対面で話し合うのは初めてである。断片 1 において、Aさんは自分の上司が部下に対していつも傲慢な態度を取るという部分まで語った後、ユイさんはすぐ「分かりますその気持ち」と共感する。ユイさんのインタビューによると、ここでの共感「似たような経験」を想起された結果である。共通経験の詳細を示さなかった理由としては、相手が「まだ話の途中」であるため、「大人しく聞くのは当然」と思っていたからである。この場合、ユイさんは語りを聞き取る途中、【作業記憶】にある<評価>は【長期記憶】にかけられ、過去の経験を想起しながら共感を起こしたが、「相手の話がまだ終わっていない」という【会話状況】に影響され、「共感的コメント」だけが通過されて、「第 2 の物語」が一時的に控えられていたということである。

さらに、Aさんの話がひと段落ついて、ユイさんはターンを取る機会を与えられたとしても、「共感的コメント」しか言えなく、第 2 の物語を語ることを放棄したのがある。会話全体を振り返る際に、ユイさんは共通経験を語らなかった原因について、「私の場合は中小企業なので、視野が狭いです」「親密関係がまだ出来ていないので、言いたいことを言えなかったのは当たり前なことだと思っています」と解釈している。

ゆえに、この場合、ユイさんはまず、一度控えられていた過去の経験を【共通経験探索】を通して呼び起こし、会話相手の経験と比較し、二人の経験は「格が違い」という結論を出した。次は【意図的判断】によって、「二人が親しくない」ということに配慮し、行為を行うことを諦めたのである。

【断片 2-台風の日の過ごし方】

01 B： 莫名地希望[自己这边风(h)大一点，#结果一点事都没有.]

「こっちは強くないかなと思ったけど、結局何も起こらなかった」

02 ユイ： [hhhhhhhhhh]

03 ユイ： [我-我是-我是（.）]我同事

「私、私は、私の同僚は」

04 B： 嗯.

「うん」

05 ユイ： 我觉得我还好，我同事有拖家带口嘛.

「私は別にいいんだけど、同僚は子持ちなので」

Bさんは日本で生活している社会人で、台風 19 号が襲ってきた時は自分がどのように過ごしていたかをユイさんに話している。断片 2 で、Bさんの「携帯で台風の動きを確認する」という話が終わったあと、ユイさんは「私、私は」と言ってから、「私の同僚は」と自己修復した。この「私は」という言葉に

は、「これから私は自分の話をするから聞いてください」ということ伝えるように、急いでターンを取る姿勢が見られる。また、ユイによって語られた内容は、「台風の日」を共有した、一種の〈情報交換〉といえる。インタビューによると、ユイさんはターンを取った理由について、「ただ向こうの話がつまらなさすぎて、少し面白い話をしたいと思いました」「関係が親しいから多分ターンを取られても不愉快に感じることはない」と説明している。この場合、過去の経験が【共通経験探索】にある〈情報交換〉によって選ばれ、【意図的評価】にある〈興味度判断〉×〈負担度判断〉×〈関係性検討〉を総合的に考えたうえ、「第2の物語」として産出されている。

【断片3-声優歌手になる夢】

- 01 C: 因为是中国这样子(.)而且年龄也很大了。
「しかも中国人なので、もういい歳だし」
- 02 ユイ: 我觉得这个是一个兴趣吗?
「これって一種の趣味なの?」
- 03 C: 是兴趣吗?
「趣味?」
- 04 ユイ: 你不是-那你是想把它当兴趣还是把它当职业啊?
「じゃあそれは単なる趣味なの?それとも将来仕事にしたいの?」
- 05 C: 就是说还是想-就是当职业啊=能当职业那最好是当职业啊。
「もちろん仕事にしてもいいというのなら仕事にしたいよ」

Cさんは日本で生活している社会人で、以前から声優歌手になる夢があったが、最近では本格的に専門学校に通い始めたことを、ユイさんに話した。ユイさんは、Cさんの状況を把握した後、「単なる趣味なの?それとも将来仕事にしたいの?」とCさんに問いかけている。ユイさんは、Cさんの状況に大変興味を持っていたと話し、「日本の声優業界は競争が激しいから彼の覚悟を確認したい」「今後の道が心配」と述べている。また、ユイさんは、「もし関係がそれほど親しくなかったらしつこく聞かない」と追加説明している。この場合、【興味点探索】にある〈私的情報への好奇心〉が【意図的判断】にある〈関係性検討〉×〈重要性判断〉×〈興味度判断〉をまとめて考慮し、「情報要求」を産出したわけである。このように、聞き手は語りの内容を拡張し、気になる情報を手に入れることができ、次に何が語られるべきかを限定することができる。

4. おわりに

本研究は、四人の中国語母語話者が知り合いの語りを聞く時の心的活動を調査することを通して、語りにおける聞き手行為の産出プロセスを解明し、聞き手行為が産出されるまでの過程の複雑性を示すことができた。今後の課題は、さらに研究対象やその会話相手を増やし、さまざまな状況における聞き手の心の動きを捉え、カテゴリーと概念の理論的飽和を目指し、聞き手行為の産出プロセスをより詳細に分析し、明らかにすることである。

参考文献

- 岩田祐子 (2015) 「日・英語初対面会話における自己開示の機能」『日・英談話スタイルの対照研究』, ひつじ書房, 37-91.
- 木下康仁 (2017) 『ライブ講義 M - GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』, 弘文堂書房.
- 陽虹 (2015) 「初対面会話における話題上の聞き手行動の日中比較」『日本語教育』162: 66-81.
- Baddeley, A. D. (1986). *Working memory*. New York: Oxford University Press.
- Tulving, E. (1982). *Elements of episodic memory*. London: Oxford University Press.